

## 深山のごんた

武田 保広

深山という山に、めっぼう強いクワガタが棲んでいるという。ミヤマクワガタのごんたというらしい。

このごんたの評判は、ぼくの所まで聞こえてくるくらいだ。なんでも体は五寸もあり、エサ場ではカブトムシやスズメバチさえ、場所を譲るといふ。また、用心深く今まで一度も人間に見られたことがないという。

「ふうむ。会ってみたいものだ。」

ああ申し訳ない、自己紹介が遅くなってしまった。ぼくは、ノコギリクワガタのギリ。ぼくも一応こちら辺では親分と言われて、恐れられている。最もぼくは、気に入らない奴は、みなこてんこてんにやっつけるからだ。

「ううん、やっぱり会ってみたい。」

と、ギリは思った。

「よし、深山まで行ってみるか。」

ギリは、手下を引き連れて出発した。

深山までは、相当の距離です。おそらく何日もかかるでしょう。皆さんもご存じだと思いが、クワガタは飛ぶのが苦手なんです。それで大移動はしないんです。

途中、休む場所で、その土地のクワガタを手下に加えなが

ら行った。もちろんエサ場での決闘で手下にしたのだが。

何日たったのだろうか。ギリと手下は、ついに深山に着いた。そこは、霧が森の木の中程までかかっている、太陽の日はかすかに霧の上の方を明るくしているぐらいだった。何の音もなく、時折ツクツクホウシの鳴き声が神秘的にこだましている。また、時折風が木々をゆらし、カサカサと音をたてる。

「こんな所にごんたはいるのだろうか。」

ギリは不安にかられた。

とにかく、夜までもぐって寝るとしよう。

「ものども、寝るぞ。」

ギリの言葉で、手下達は落ち葉をかきわけ、もぐっていった。

夕方、ギリ達は地上に出た。

「ついに、ごんたに会える。」

と、ギリは期待で身震いするのを感じた。

他の虫たちが、樹液であふれるエサ場に集まってきた。カブトムシ・スズメバチ・カナブン・クワガタ・ゴマダラチョウ・・・。暗くなる頃には、虫たちであふれんばかりだ。

「すごい！きっとごんたは来るぞ。」

ギリは待った。一晚中待った。

そのうちに辺りは、明るくなり、ついにごんたは現れなかった。

次の日も、また次の日もごんたは現れなかった。

「ごんたはいないのだろうか。どこかに行ってしまったのだろうか。どうしてもごんたに会ってみたい。」

願いが叶わないと、ますます会ってみたくなるもの。ギリは、何日も何日もエサ場に脚を運んだ。もしかしたら昼間に来ているのかもしれないと、昼間にもエサ場に行ってみた。しかし、会えなかった。

そして、何日かたったある日の夜。時折強い風が吹く、秋の足音が聞こえてきそうな寒い夜がきた。

この夜は、北風が強く、クヌギの葉をみんな吹き飛ばしそうなくらいだった。クヌギの樹液の泉には、大勢の虫たちが集まっていた。樹液が少ないので、あちらこちらでいさかいが起こり、ギリ達も巻き込まれていった。

ギリはいい樹液の泉を見つけ、先客たちを次々と挟み倒していった。

「これでやつとゆつくり食べられるわい。」

その時だ。あの恐ろしい人間の声が聞こえた。

「父さん。大きなノコギリクワガタがいるよ。」

「しまった。エサに夢中で、人間の臭いに気がつかなかった。」人間の子どもの手がギリに伸びようとしたそのとき、生暖かい風が起こつたのにギリは気づいた。

それは、ギリのすぐそばに、今まで見たこともない、それ

はそれは大きなミヤマクワガタが飛んできたからだだった。回りにいた虫たちが叫んだ。

「ごんた様だ。」

「父さん。大きなミヤマクワガタが飛んできたよ。」

「やった！すごいぞ！すごいぞ！」

そのときはもう、その大きなミヤマクワガタは人間の子どもの手につかまっていた。

ギリは、一気に飛び立った。

「あいつがごんたか。それにしても助かった。」

振り返ったギリは、笑っているごんたを見た。

「もしや、あいつは俺を助けたのか……。これが虫達に尊敬される理由なのか。」

冷たい北風が、何もなかったように吹き抜けた。

「父さん。やったね。運がよかったね。。。。。」

「本当にラッキーだったぞ。」

人間の親子の声が闇夜の向こうに遠ざかっていった。

— 完 —



モデルとなったミヤマクワガタ